古今集

544
コ
103

544
コ
103

昭和 24. 7. 13
184055
圖書館

やまとうたは人の心をたねとしてよろづのこと
の葉とぞなれりける世中にある人ことわざし
げきものなれば心に思ふ事を見るものきく
ものにつけていひいだせるなり花になくうぐひす水に
すむかはづの声をきけばいきとしいけるものいづ
れかうたをよまざりける力をもいれずして
あめつちをうごかしめに見えぬおに神をもあはれ
と思はせをとこ女のなかをもやはらげたけき
ものゝふの心をもなぐさむる哥なり此哥あめつ
ちのひらけはじまりける時よりいできにけり　然

[illegible]
あまのうきはしのしたにてめ神を神と
なりたまへることをいへる哥なり　しかあれども世に
つたはることはひさかたのあめにしてはしたて
るひめにはじまり
したてるひめとはあめわかみこのめなり　せうとの
神のかたちをかにうつりてかゝやくをよめるえびす哥なるべし　これら
はもじのかずもさだまらず哥のやうにもあらぬことゞもなり
あらかねのつちにしてはすさのをのみことよりぞ
おこりけるちはやぶる神代には哥のもじもさだまらず
すなほにして事の心わきがたかりけらし
人の世となりてすさのをのみことよりぞ
みそもじあまりひともじはよみける

すさのをのみことはあまてる御おほん神のこのかみなり女と住
給はんとていづもの国に宮つくりし給ふ時その
の所にやいろの雲のたつをみてよみ給へるなり
やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきを
かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれび
露をかなしぶ心ことばおほくさまざまになりに
けるとほき所もいでたつあしもとよりはじ
まりて年月をわたりたかき山もふもとの
ちりひぢよりなりてあま雲たなびくまで
おひのぼれるごとくにこの歌もかくのごとくな
るべしなにはづの歌はみかどのおほんはじめ也
おほさゝきのみかどのなにはづにてみこときこえける
時春宮をたがひにゆづりてくらゐにつき給はで

三年ばかりになれども王仁といふ人のいぶかりおもひて
よみてたてまつりける歌也この花は梅の花をいふなるべし
あさか山のことのはゝうねめのたはぶれよりよみて
く
かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりける時
くにのつかさことおろそかなりとてまうけなどしたりけれど
すさまじかりければうねめなりける女のかはらけとりて
よめるなりこれにぞおほきみの心とけにける
このふた歌はうたの父母のやうにてぞ手ならふ人
のはじめにもしけるそもそも歌のさまむつ
なりからのうたにもかくぞあるべきそのむくさ
のひとつにはそへうたおほさゝきのみかどをそへ
たてまつれるうた

なにはづにさくやこの花冬ごもり

とは春へとさくやこの花といへるなるべし

数へ歌はかやうなるべし

さく花に思ひつくみのあぢきなさ身に

いたつきのいるもしらずてといへるなるべし

これはたゞことにいひてものにたとへなどもせぬ事なりこ
の歌いかにいへるにかあらんその心えがたしいつゝにたゞ
ごと歌といへる
なんこれにはかなふべき

三つにはなずらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなば恋し

きごとにきえやわたらんといへるなるべし

これは物にもなずらへてそれがやうになんあるといふやうなり
この歌よくかなへりとも見えずたらちめのおやのかふこのまゆ
こもりいぶせくもあるかいもにあはずて
かやうなるやこれにはかなふべからん

四つにはたとへうた

我恋はよむともつきじありそ海の浜の

まさごはよみつくすともといへるなるべし

これはよろづの草木鳥けだものにつけて心をみするなりこの歌は
かくれたる所なんなきされどはじめのそへ歌とおなじやうなれば
すこしさまをかへたるなるべしすまのあまのしほやく煙風
をいたみ思はぬかたにたなびきにけりこの歌などやかなふべからん

いつゝにはたゞごとうた

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことの

葉うれしからましといへるなるべし

これはことのとゝのほりたゞしきをいふなりこの歌なんさらにかなはず
とめ歌とやいふべからん山桜あくまで色をみつるかな花ちるべくも風ふかぬ世に

ひめかゞみひらうき

このよの母へよしあし人々の心かゝきのへ見きゝて

よし川家にてつくりしおもとといひつるおもうへし

つき〳〵の心花りまろうにつるかちりあくさなるうき

よろ歌心おとのこいてこれたる　このこれは色よ

ひとれはそれ人まぬしくあ思ひてさ給ふなるを

こゝろにハむしろく歌かいかつてひへる事にもおもしろ

あいにまさとろ我もしめ我思ひハらくへくなし

あるぬいましへ乃よしれみかしと春の花はあはしき

秋の月は秋しとにさゆるしまく〳〵我めしてこ

ゝろにつけつくらく我思ひてまく〳〵しめさまにあ

らかるを我らにとてたよれなき花にまよらひある

を月我おりふとてあるへあ花を心あられる心ら我

みさまひくはらしとろかきとしろしめしろん

しろあろのことはもくはれいろりあへつくさし山

みろけて春我ひなろこひ我はきれさのし

みんにあまりふしの煙よあろへてへさこひ

松虫乃こゑを我あれひる高砂信の江乃松をと

おもひをひのやうにおもはれし思ひ出むかしは思ひ
出らくなどころをへしかた一時はくれぬるに恵うくこそ
いとひくらうなくさめなし文台のあし出ちに花の
らうはかん嫁の夕くれよころうれ房のはきてお
なまさとしてとにかくかん乃夕けに見ゆる雲と浪と
はるけく草ハ露の衣はみそてうらみ
井とろ紀にはきての六波羅をこりて時はう
志なひ世にこひしく覚しとうとくなりある
る松山の浪はわけ野なの衣は今秋なる紀の
ちくさはなめあつるを乃志さけてつきは

うへ帝るくされさけのきなむし人へのひ
らし乃らは紀ひきく世にはらかんきさつに
とふじの山を懐く淀なりなりのはしを
つ侍なかしきくつる子のいらんもなく
さめきのかしくるなてくつくひらしちをなるの
御時るのう山へまりもの悩のおらん
世や斉しかん紀をろしめしなかまきんのおかり
むとふよれなるろのちさの中しの人
丸なんうこのひしなかは悩されハ君を
ひとをなは紀あはせてとゆをとゆめ悩なへし秋

乃ゆふへ龍田川になかるゝもみちはゝみかとの
おほんめに錦とみたまひ春乃あしたよし
野の山乃さくらハ人まろか心（閑イ）には雲かとのみ
なんおほえける又山のへのあか人といふ人ありけ
りうたにあやしくたへなりけり人まろはあか人か
うへにたゝむことかたくあか人は人まろかしもに
たゝむことかたくなんありける

[illegible]

この[illegible]

あまた人をくれ竹の世ゝにきこえかたいとのよりより
にたえすそありけるこれよりさきの哥を
あつめてなん万葉集となつけられたりけるこゝ
にいにしへの事をも哥をもしれる人よむ
人おほからすいまこの事をいふにつかさ
くらゐたかき人をはたやすきやうなれはいれす
そのほかにちかき世にその名きこえたる人は
すなはち僧正遍昭は哥のさまはえたれとも
まことすくなしたとへはゑにかける女をみて
いたつらに心をうこかすかことし

かはらぬ世まゐれ名きこえし給へはあれは
ら僧正遍昭ハうた乃さまハえたれとも まことすくなし
くなしたとへハゑにかけるをうなをみて
いたつらに心をうこかすかことし
あさみとりいとよりかけて白露を
玉にもぬける春の柳か
はちすはのにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく
さかのにてむまよりおちてよめる　名にめてゝおれるはかりそをみなへし
われおちにきと人にかたるな
ありはらのなりひらはその心あまりて
ことはたらすしほめる花の色なくて
にほひのこれるかことし
月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして
おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人のおいとなるもの
ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさるかな
ふんやのやすひてハことはゝたくみにてそのさまは

身におはすいはゝあき人のよききぬきたらんか
ことし　吹からに秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしと
いふらん　深草のみかとの御国忌に
草ふかきかすみの谷にかけかくしてる日のくれしけふに
やはあらぬ　宇治山の僧きせんハことはかすかにして
はしめをはりたしかならすいはゝ秋の
月をみるにあかつきの雲にあへるかことし
わかいほはみやこのたつみしかそすむ
世をうち山と人はいふなり　よめるうたおほくきこえ
ねハかれこれをかよはしてよくしらすをのゝこ
町ハいにしへのそとほりひめの流なりあはれなる
やうにてつよからすいはゝよきをうなのなやめる
所あるににたりつよからぬハをうなの哥

あはれもあるべし
さひてぬきたやくのかんこつとりん
善としつきせをはあさしとおもひ
あまてら河のかは世の人の心のむすぶかありける
わかせこのはなの哥はいつもおもへいはんとて
そとほりひめの哥
ゆたかのくものかゝまひの見てなる
大伴のくろぬ
しそのさまいやしいはゞたきゞおへるやま
人の花のかげにやすめるがごとし
おもひ出て云しき
時ハ天川かりの
きせてよく人々いたてまつや
喜撰山さくら
このほかの人々
その名きこゆるのべにおふるかづらのはひひろ
ごりはやしにしげき木の葉のごとくにお
ほかれどうたとのみ思ひてそのさましらぬ
なるべしかゝるにいますべらぎのあめのし

ろしめす事よつのときこゝのかへりになむ
なりぬるあまねき御うつくしみのなみや
しまのほかまでながれひろき御めぐみのかげ
つくば山のふもとよりもしげくおはしまして
よろづのまつりごときこしめすいとまもろもろ
のことをすてたまはぬあまりに古の事をもわすれ
じふりにしことをもおこしたまふとていまもみ
そなはしのちの世にもつたはれとて延喜五
年四月十八日に大内記紀とものり御書の
ところのあづかりきの貫之さきのかひのさう

官おほしかうちのみつ〇右衛門の府生みふの
たゝ〇らにおほせられて万えうしふにいらぬ
ふるきうたみつからのをもたてまつらしめ給
ひてなむそれかなかにむめをかさすよりはし
めてほとゝきすをきゝもみちををり雪を
みるにいたるまて又つるかめにつけて君を思ひ
人をもいはひ秋萩夏草をみてつまをこ
ひあふさか山にいたりてたむけをいのりあるは
春夏秋冬にもいらぬくさ／＼のうたをなむえ
らはせたまひけるすへて千うたはたまき名

つけて古今わかしふといふかくこのたひあつめ
えらはれて山した水のたえす浜のまさこの
かすおほくつもりぬれは今はあすか川のせ
になるうらみもきこえすさゝれいしのいはほ
となるよろこひのみそあるへきそれまくらことは春
の花にほひすくなくしてむなしき名のみ
秋のよのなかきをかこてれはかつは人のみゝ
にをそりかつはうたの心にはちおもへとたなひく雲
のたちゐなくしかのおきふしはつらゆきらか
この世におなしくむまれてこの事のときにあへ

あへるをなんよろこひぬる人まろなくなりにたれ
と歌のことゝゝまれるかなたとひ時うつり
事さりたのしひかなしひゆきかふともこ
のうたのもしあるをやあをやきのいとたえ
す松のはの散うせすしてまさきのかつら
なかくつたはりとりのあとひさしくとゝまれ
らは歌のさまをもしりことの心をえたらん
人はおほそらの月をみるかことくにいにしへ
をあふきていまをこひさらめかも

古今和歌集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

年の内に春はきにけりひとゝせをこぞとやいはんことしとやいはん

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

題しらず　よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

二條のきさきの春のはじめの御哥

雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず　よみ人しらず

梅が枝にきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらず　よみ人しらず

心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはく　さきのおほきおほいまうちぎみの哥也

二条后のとう宮のみやすむ所と申ける
時正月三日おまへにめしておほせことあるあひたに
日はてりなから雪のかしらにふりかゝりけるを
よませ給ける　　ふんやのやすひて
春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき
雪のふりけるをよめる
きのつらゆき
霞たちこのめもはるの雪ふれは花なきさとも花そちりける
春のはしめによめる　ふちはらのことなほ
春やとき花やおそきとききわかむ鶯たにもなかすもあるかな

春のはしめのうた　みふのたゝみね
春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそ思ふ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
源まさすみ
谷風にとくる氷のひまことにうちいつる浪や春のはつ花
紀とものり
花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる
大江千里
鶯の谷よりいつるこゑなくは春くることをたれかしらまし
在原棟梁　業平朝臣男

たてと花もにほはぬ山さとはものうかるねに鶯そなく
題しらす　よみ人しらす
のへちかく家ゐしせれは鶯のなくなるこゑはあさなあさなきく
春日野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり
かすかのゝとふひのゝもり出てみよ今いくかありてわかなつみてん
み山には松の雪たにきえなくに宮こはのへのわかなつみけり
梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらはわかなつみてん
仁和のみかとみこにおましましける時人にわかな
たまひける御うた
きみかため春の野に出てわかなつむ我衣てに雪はふりつゝ

歌たてまつれとおほせられし時よみてたて
まつれる　つらゆき
春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん
題しらす　在原行平朝臣
春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ
寛平御時きさいの宮の歌合によめる
源むねゆきの朝臣
ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり
哥たてまつれとおほせられし時よみてたて
まつれる　つらゆき

我世ころ衣ナる[illegible]の婦たしにの[illegible]乃みちるを[illegible]まかり[illegible]
まて柳のいとちらく[illegible]春[illegible]みされて[illegible]
西大寺乃[illegible]此柳[illegible]婦

備前[illegible]

わさ縁[illegible]白露[illegible]ぬる春乃柳かな

題しらす　よみ人しらす

[illegible]のとのにつる春は花　[illegible]

末遠のまつ[illegible]

かよは[illegible]

[illegible]　三河国[illegible]

春くれは[illegible]白雲のみちゆ[illegible]やつれし

帰[illegible]　伊勢

春霞たつを見捨てゆく雁は花なき里にすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

折つれは袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯のなく

[illegible]袖[illegible]やとの梅

やとちかく梅の花うへしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり

梅花[illegible]

[illegible]

東三条[illegible]

鶯のかさにぬふてふ梅花折てかさゝん老かくるやと

題しらす　　素性法師

よそにのみあはれとそ見し梅花あかぬ色かはおりてなりけり

梅の花を折て人におくりける

とものり

きみならてたれにか見せん梅花色をも香をもしる人そしる

くらふ山にてよめる

つらゆき

梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける

月夜に梅の花を折てと人のいひけれは

をるとてよめる　　みつね

月夜にはそれとも見えす梅花香をたつねてそしるへかりける

はるの夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝ

はつせにまうつることにやとりける人の家に

ひさしくやとらてほとへてのちにいたれりけれは

かの家のあるしかくさたかになんやとりはあると

いひいたして侍りけれはそこにたてりける

梅花をおりてよめる

つらゆき

人はいさ心もしらすふるさとは花そ昔の香に匂ひける

水のほとりに梅の花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ川を花とみておられぬ水に袖やぬれなん

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家にありける梅の花のちりけるをよめる

貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

梅か香を袖にうつしてとゝめてハ春ハすくともかたみならまし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす　よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅の花恋しき時の思ひ出にせん

人の家にうへたりけるさくらの花さきはしめたりけるをみてよめる

貫之

ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはさらなん

題しらす　よみ人しらす

山たかみ人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我見はやさん

又は、さとゝほみ人もすさめぬ山さくら

山桜わか見にくれは春霞峰にも尾にもたちかくしつゝ

そめとのゝきさきのおまへに花かめに桜の
花さゝせたまへるを見てよめる

おほきおほいまうちきみ

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし

なきさの院にてさくらを見てよめる

在原業平朝臣

世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす　よみ人しらす

いしはしる滝なくもかな桜花たおりてもこん見ぬ人のため

山のさくらを見てよめる

そせい法師

見てのみや人にかたらん桜花てことにおりていへつとにせん

花さかりに京を見やりてよめる

みわたせは柳桜をこきませて都そ春の錦なりける

桜の花のもとにて年のおいぬる事をなけきてよめる

きのとものり

色もかもおなし昔にさくらめと年ふる人そあらたまりける

たまつさくしの紙にかゝつ

はしゆる

八孫かたしあておかつる書裁ちくれかんむの梅か

斎はまはれと作られしはよくみてそまつれる

梅はなしこれよろしと是也の出代ひらかみゆる白雲

寛永年中附きさいの文は会合のうち

ゆきとのつき

みよはるに出入に書きゝる梅花宮ものよそおやまく風

やうらひまう海にて月のわかきまゝるとしなみ

年高　伊勢

梅むかしまいつれるとしれぬへの御よわかれや

はるくるの花はさらにくしくとへさかうる

人のきゝてりかる附よちみをる

ちかんへ書く次

わくらわと名はこそそれ梅むとしたまれをのへ文を給

海し　なやむとひしれ朝た

ちようらいわとく事とて降りましきしとこいつとも花とみきしめや

題しらず　ちらん人書く次

ちよきねまるふれと書傳すゆ梅作に古く梅おへ八井わてあ

なりうちへあかとあ梅の梅むかしやりかりておすまつゝいらん

きのありとも

櫻色に衣はふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

さくら花のさけりけるを見にまうてきたりける人によみてをくりける

みつね

わかやとの花見かてらにくる人はちりなん後そこひしかるへき

亭子院歌合の時よめる

伊勢

見る人もなき山里の櫻花ほかのちりなん後そさかまし

古今倭歌集巻第二

春哥下

題しらす　よみ人しらす

春霞たなひく山の桜花うつろはんとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにを桜に思ひまさまし

のこりなくちるそめてたき桜花ありて世中はてのうけれは

このさとにたひねしぬへし桜花ちりのまかひに家ちわすれて

うつせみの世にもにたるか花桜さくとみしまにかつちりにけり

僧正遍昭によみておくりける

これたかのみこ

桜花ちらはちらなんちらすとてふるさと人のきてもみなくに

雲林院にてさくらの花のちりけるを見てよめる

そうく法師

桜ちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにする

さくらの花のちり侍けるをみてよみける　そせい法師

花ちらす風のやとりはたれかしるわれにをしへよゆきてうらみん

うりんゐんにてさくらの花をよめる

そうく法師

いさ桜我もちりなんひとさかりありなは人にうきめみえなん

あひしれりける人のまうてきてかへりにけ
るのちによみて花にさしてつかはしける
つらゆき
ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらはちらなん
山のさくらを見てよめる
春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへき物を
心ちそこなひてわつらひける時に風にあたら
しとておろしこめてのみ侍りけるあひ
たにおれる桜のちりかたになれりけるを見て
よめる
藤原よるかの朝臣
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり
東宮雅院にて桜の花のみかは水にちりて
なかれけるを見てよめる
すかのゝたかよ
枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあわとこそなれ
桜の花のちりけるをよめる
つらゆき
ことならはさかすやはあらぬ桜花見る我さへにしつ心なし
桜のことくとくちる物はなしと人のいひけれは
よめる
桜花とくちりぬともおもほえす人の心そ風もふきあへぬ

さくら花のちるをよめる

きのとものり

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

春宮のたちはきのちんにて桜の花のちるを

よめる　藤原のよしかせ

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見ん

さくらのちるをよめる

凡河内みつね

雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん

ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

つらゆき

山たかみ見つゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり

題しらす　一本　大伴くろぬし

春雨のふるは涙かさくら花ちるをおしまぬ人しなけれは

亭子院歌合歌

つらゆき

桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そ立ける

ならのみかとの御うた

ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらす花はさきけり

春のうたとてよめる

よしミねのむねさた
花の色ハ霞にこめて見せすとも香をたにぬすめ春の山かせ
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
素性法師
花の木も今ハほりうゑし春たてハうつろふ色に人ならひけり
題しらす　よミ人しらす
春の色のいたりいたらぬ里ハあらしさけるさかさる花のみゆらん
はるのうたとてよめる
つらゆき
三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん

うりん院のみこのもとに花みにきた山乃
ほとりにまかれりける時によめる
そせい
いさけふハ春の山へにましりなんくれなハなけの花のかけかハ
はるのうたとてよめる
いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすハ千代もへぬへし
題しらす　よミ人しらす
春ことに花のさかりハありなめとあひみん事ハ命なりけり
花のことよのつねならハすくしてしむかしハ又もかへりきなまし
吹風にあつらへつくる物ならハこのひともとハよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原おきかせ

さく花はちくさなからにあたなれとたれかは春をうらみはてたる

春霞色のちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

在原元方

霞たつ春の山へはとをけれと吹くる風は花の香そする

うつろへる花をみてよめる　みつね

花みれは心さへにそうつりける色にはいてし人もこそしれ

題しらす　よみ人しらす

鶯のなくのへことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風にあつらへつくる物ならはこのひともとはよきよといはまし

典侍洽子朝臣

ちる花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に歌合せんとしける時によめる

藤原後蔭

花のちる事やわひしき春霞たつたの山の鶯のこゑ

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへハをのか羽風に散花を誰におほせてこゝらなくらん

鶯の花の木にてなくをよめる

三つね

しるしなき音をもなくかな鶯のことしのミ散花ならなくに

題しらす　よミ人しらす

こまなめていさ見にゆかんふるさとハ雪とのミこそ花ハ散らめ

散花をなにかうらミん世中に我身もともにあらんものかハ

小野小町

花の色ハうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

仁和の中将のみやすん所の家に歌合

せんとしける時によめる

そせい

をしと思ふ心ハいとによられなん散花ことにぬきてとゝめん

しかの山こえに女のおほくあへりけるによみて

つかはしける

つらゆき

あつさゆミ春の山へをこえくれハ道もさりあへす花そ散ける

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春のゝにわかなつまんとこしものを散かふ花に道ハまとひぬ

山てらにまうてたりけるによめる

やとりして春の山へにねたる夜は夢の内にも花そちりける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

吹風と谷乃水としなかりせはみ山かくれの花をみましや

しかよりかへりけるをんなともの花山にいりて
ふちの花のもとにたちよりてかへりけるに
よみておくりける

僧正遍昭

よそにみてかへらん人にふちの花はひまつはれよえたはおるとも

家にふちの花のさけりけるを人のたちとま
りてみけるをよめる

みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすきかてにのみ人のみるらん

題しらす　よみ人しらす

いまもかもさき匂ふらん橘のこしまのさきの山ふきの花

春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山ふきの花

山ふきはあやなくさきそ花見んとうへけん君かこよひこなくに

よしの河のほとりにやまふきのさけりけるを
よめる　つらゆき

よしの川岸の山吹ふく風にそこのかけさへうつろひにけり

題しらす　読人しらす

かはつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この哥はある人のいはくたちはなのきよともか哥也

春乃哥とてよめる　そせい

思ふとち春の山へにうちむれてそこともいはぬたひねしてしか

はるのとくすくるをよめる　みつね

あつさゆみ春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひに鶯のこゑのひさしうきこえさりけるをよめる

つらゆき

なきとむる花しなけれは鶯もはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに

山川より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

春をゝしみてよめる

もとかた

をしめともとまらなくに春霞かへるみちにしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
おきかせ
こゑたえすなけや鶯一とせに二たひとたにくへき春かは
やよひのつこもりの日花つみよりかへり
ける女ともをみてよめる
みつね
とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か
やよひのつこもりの日雨のふりけるにふちの
花をおりて人につかはしける
なりひらの朝臣
ぬれつゝそしひておりつる年の内に春はいくかもあらしとおもへは
亭子院の歌合のはるのはてのうた
みつね
けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　　よみ人しらす

わかやとの池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなかん

この哥ある人のいはく柿本の人まろか也

う月にさけるさくらをみてよめる

紀としゆき

あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらん

題しらす　　よみ人しらす

さつきまつ山郭公うちはふき今もなかなんこそのふるこゑ

伊勢

五月こはなきもふりなん郭公またしきほとのこゑをきかはや

よみ人しらす

さ月まつ花橘の香をかけは昔の人の袖の香そする

いつのまにさ月きぬらん足ひきの山郭公いまそなくなる

けさきなきいまたたひなる郭公花たちはなにやとはからなん

おとは山をこえける時に郭公のなくをきゝてよめる

きのとものり

音羽山けさこえくれは郭公こすゑはるかにいまそなくなる

郭公のはしめてなきけるをきゝてよめる

よめる　　そせい

郭公はつこゑきけはあちきなくぬしさたまらぬ戀せらるはた

ならのいそのかみてらにて郭公のなくをよめる

いその神ふるき都の郭公こゑはかりこそ昔なりけれ

題しらす　　よみ人しらす

夏山になく郭公心あらは物思ふ我にこゑなきかせそ

郭公なくこゑきけは別にしふるさとさへそこひしかりける

郭公なかなくさとのあまたあれはなほうとまれぬ思ふものから

思ひいつるときはの山の郭公からくれなゐのふりいてゝそなく

こゑはして涙はみえぬ郭公わか衣手のひつをからなん

足引の山郭公おりはへて誰かまさるとねをのみそなく

今さらに山へかへるな郭公こゑのかきりは我やとになけ

みくにのまち

やよやまて山郭公ことつてん我世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

きのとものり

五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかくなきていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる郭公わかやとをしもすきかてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくになと郭公こゑたえぬらん

きゝつゝゆる

夏の夜はふすかとすれは郭公鳴一声にあくるしのゝめ

みふのたゞみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山郭公

紀秋岑

夏山に恋しき人や入にけん声ふりたてゝなく郭公

題しらす

読人しらす

去年の夏鳴ふるしてし郭公それかあらぬか声のかはらぬ

郭公の鳴をきゝてよめる

つらゆき

五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとか夜たゝ鳴らん

さふらひにてをのこともの酒たうへけるに

めして郭公まつ歌よめとありけれはよめる

みつね

郭公声もきこえす山ひこはほかに鳴音をこたへやはせぬ

山に郭公の鳴けるをきゝてよめる

つらゆき

郭公人まつ山になくなれは我うちつけに恋まさりけり

はやくすみける所にて郭公の鳴けるをきゝて

よめる　　　たゝみね

むかしへや今もこひしき郭公ふるさとにしも鳴てきつらん

郭公のなきけるをきゝてよめる

みつね

郭公我とはなしに卯花のうき世中になきわたるらん

はちすのつゆをみてよめる

僧正遍昭

はちすはのにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月のおもしろかりける夜あかつきがたによめる

きよはらふかやぬ

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん

となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければ

をしみて此うたをよみてつかはしける

みつね

ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこなつの花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへすゞしき風や吹らん

みつね

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風のおとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる

つらゆき

かは風のすゝしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋は立らん

題しらす　よみ人しらす

わかせこか衣のすそを吹返しうらめつらしき秋の初風

昨日こそさなへとりしかいつのまに稲葉そよきて秋風のふく

秋風の吹にし日より久方のあまのかはらにたゝぬ日はなし

久方のあまのかはらのわたしもり君わたりなはかちかくしてよ

天川もみちをはしにわたせはやたなはたつめの秋をしもまつ

恋〳〵てあふ夜はこよひ天川きりたちわたりあけすもあらなん

寛平御時なぬかの夜うへにさふらふをのこともうたたてまつれとおほせられける時人にかはりてよめる

とものり

天川あさせしら浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

菅原孝標女

おもひやるかなたの七夕の年に一たび逢ふはおもふらは

なぬかの日の歌よめる

凡河内みつね

年毎に逢とはすれど七夕のぬるよのかずぞすくなかり

七夕のあひしかど年に一たびあふよのかずのすくなきを

題しらず　そせい

こよひこん人にはあはじ七夕のひさしきほどにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる

源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖ぞひちぬる

やうかの日よめる　みぶのたゞみね

けふよりは今こん年のきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき

題しらず　よみ人しらず

このまよりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞかなしき

物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりと思へば

ひとりぬるとこは草葉にあらねども秋くるよひはつゆけかりけり

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことの限なりける

かんなりのつほに人ゝあつまりて秋の夜お
惜むうたよみけるついてによめる

みつね

かくはかり惜と思ふ夜をいたつらにねてあかすらん人さへそうき

題しらす　　讀人しらす

白雲に羽うちかはしとふ雁のかすさへ見ゆる秋の夜の月

さ夜中と夜はふけぬらし雁かねのきこゆる空に月わたる見ゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月みれはちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

たゝみね

久方の月の桂も秋は猶もみちすれはやてりまさるらん

月をよめる　　在原元方

秋の夜の月の光しあかけれはくらふの山もこえぬへら也

人のもとにまかれりける夜きりきりすのなきけるをきゝてよめる

藤原たゝふさ

蟋蟀いたくなゝきそ秋の夜のなかき思ひは我そまされる

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆく秋題

秋はものゝあはれをしらする雲はこゝろにかゝる袖やぬるらん

冥しも次　よみ人しらす

秋くれはをとつれぬまて萩わたるねしとやと風に吹き

端乃さゝ露しらぬとよまし茅むしのこゑはふかれて

きこえつゝ萩よりやみるかなつかしき山の虫のねそあはれなる

妹のかれにましき秋霜の下葉も露のこゑやむらん

あきのよの人まつ虫のねもあはれなるゆふべていさよふ月

とみちたれ殺てつゆわか我宿にされ我松虫こゝろあらん

ひとりの秋つる人をりふれねとも虫の音けかてこゝろなる

月くらしあかく山里は夕まくれ風さらに聞かなとも人目なし

とかりかりにゆふにあはれ

在原元方

緒人をわたの原にしも川をわけたるゆくゑもしらぬきよき

是真の乃人これ家の歌合のうた　　よものし

蟬風に萩香の音きこえあるたちむ堂遊けしかつらん

是しも次　よみ人しらす

ふる川よいかばかりと色も思ひしけき吹風にかわかさぬ袖の

やまとに見そぬれの袖りの白露のとこそすむことわ床をみるくま

春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋霧の上に

夜をさむみ衣かりかね鳴くなへに萩の下葉もうつろひにけり

この歌はある人のいはく柿本の人まろかなりと

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風にこゑをほにあけてくる舟は天のとわたるかりにそありける

かりのなきけるをききてよめる

みつね

うきことを思ひつらねてかりかねのなきこそわたれ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合のうた

山里は秋こそことにわひしけれ鹿のなくねにめをさましつつ

たたみね

よみ人しらす

おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時そ秋はかなしき

題しらす

秋萩にうらひれをれはあしひきの山したとよみ鹿のなくらん

秋萩をしからみふせてなく鹿のめには見えすておとのさやけさ

これさたのみこの家の歌合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿は今やなくらん

むかしあひしりて侍りける人の秋の野に
あひて物がたりしけるついでによめる
みつね
秋萩のふるえにさける花見ればもとの心はわすれざりけり
題しらず　よみ人しらず
あきはぎの下葉いろづくいまよりやひとりある人のいねがてにする
鳴わたる雁のなみだやおちつらん物思ふやどの萩のうへの露
萩の露玉にぬかんととればけぬよし見ん人は枝ながらみよ
ある人のいはく、この歌はならのみかどの御歌なりとなん
おりてみばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露

萩が花ちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさ夜はふくとも
是貞のみこの家の歌合によめる
文屋あさやす
秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ
題しらず　僧正遍昭
名にめでておれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな
僧正遍昭がもとにならへまかりける時に
をとこ山にてをみなへしを見てよめる
ふるのいまみち
をみなへしうしとみつゝぞゆきすぐるをとこ山にしたてりと思へば

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋のゝにやとりはすへし女郎花なをむつましみたひならなくに

題しらす　　をのゝよしき

女郎花おほかる野へにやとりせはあやなくあたのなをやたちなむ

朱雀院の女郎花あはせによみてたてまつりける

左のおほいまうちきみ

女郎花秋のゝ風にうちなひき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣

秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

みつね

つまこふる鹿そなくなる女郎花をのかすむ野の花としらすや

女郎花吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

たゝみね

人のみることやくるしき女郎花秋きりにのみたちかくるらむ

ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへてみましを

物へまかりけるに人の家に女郎花うへたりけるをみてよめる

かねみのおほきみ

兼覧王

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたるやとにひとりたてれは

寛平御時蔵人所のをのこともさかのに
花みんとてまかりたりける時かへるとてみ
な歌よみけるついてによめる

平さたふん

花にあかてなにかへるらん女郎花おほかる野へにねなまし物を

是貞のみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけし藤はかまくる秋ことに野へをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やとりせし人のかたみか藤袴わすられかたき香ににほひつゝ

ふちはかまをよめる

そせい

ぬしゝらぬ香こそにほへれ秋の野にたかぬきかけし藤袴そも

題しらす

平貞文

今よりはうへてたにみし花すゝき穂にいつる秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

雁のゝ啼のなかにと云花もなく花は出てまねく袖と云也らん

素性法師

我のみや哀と思はん蛬なくゆふかけの山となてしこ

題しらす　よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春は見し秋はいろ〳〵の花にそありける

もゝくさの花のひもとく秋のゝに思ひたはれん人なとかめそ

月草に衣はすらんあさ露にぬれての後はうつろひぬとも

仁和のみかと親王におはしましける時ふる

のたきに御らんせんとておはしましける道に

遍昭か母の家にやとりたまへりける時に

庭を秋のゝにつくりて御物かたりの

ついてによみてたてまつりける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも秋ののらなる

みてよめる　　つらゆき

秋風の吹にし日よりおとは山峯の梢も色付にけり

これさだのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

白露乃色ハひとつをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらむ

壬生忠岑

秋の夜の露をハ露とおきながら雁の涙や野への色をそむらん

題しらす　　読人しらす

秋の露色〳〵ことにおけばこそ山の木の葉のちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

白露も時雨もいたくもる山ハ下葉のこらす色付にけり

秋のうたとてよめる

ありはらのもとかた

雨ふれと露ももらしをかさとりの山ハいかてかもみぢそめ劔

神のやしろのあたりをまかりける時にいかきのうちの紅葉をみてよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

是貞のみこの家の哥合によめる

一 きくみる

又此もかきより出来る第八行より公の御作文了無之
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
よみ人しらす
ちはやふるかみなひ山のもみちはに思ひはかけしうつろふものを
きりのよそりうみ袖みてくるあ
きのとものり
すゝきあれ秋萩のはなさきにけりたかさこのをのへのしかは今やなくらん
是貞のみこの家の哥合のうた

よみ人しらす
奥山にもみちふみわけなく鹿の声きくときそ秋はかなしき
わくのこさとてよある
坂上是則
秋山のもみちをみれはなく鹿の人のせんさらつよきく小しかひつけてしへなる
うら
在原元方
もしも秋のはきの花やちりぬらむそらにあはれなる風を
寛平御時きく此花をよみける
すかはらの朝臣

久かたの雲の上にて見る菊ハあまつほしとそあやまたれける

この哥ハまた殿上ゆるされさりける時に

めしあけられてつかうまつれるとなん

これさたのみこの家の哥合のうた

きのとものり

露なからをりてかさゝむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

大江千里

植し時花まちとほにありし菊うつろふ秋にあはむとやみし

同し御時せられける菊合にすはまを

つくりて菊の花うへたりけるにくはへたりけるうた

ふきあけのはまのかたにきくうへたりけるに

よめる　　すかはらの朝臣

秋風の吹上にたてる白菊ハ花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけん

菊の花のもとにて人のひとまてるかたをよ

める　　とものり

花みつゝ人まつ時ハ白妙の袖かとのみそあやまたれける

おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる
ひともとゝ思ひし花をおほさはの池のそこにはたれかうへけん
世中のはかなき事を思ひけるおりに菊の花を
みてよめる　　　　つらゆき
秋の菊匂ふかきりはかさしてん花よりさきとしらぬわか身を
白菊の花をよめる　　　凡河内みつね
心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせる白菊の花
これさたのみこの家の哥合のうた
　　　　よみ人しらす

色かはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそみれ
仁和寺に菊の花めしける時に哥そへてたてまつれとおほせられけれはよみてたてまつりける
　　　　平さたふん
秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされは
人の家なりける菊の花をうつしうへたりけるをよめる
　　　　つらゆき
さきそめしやとしかはれは菊の花色さへにこそうつろひにけれ
題しらす　　　よみ人しらす
さほ山のはゝその紅葉散ぬへみよるさへみよとてらす月影

宮仕へひさしうつかうまつらて山里に
こもり侍りけるによめる

藤原関雄

おく山のいはかきもみち散ぬへしてる日のひかりみる時なくて

題しらす　よみ人しらす

竜田川紅葉みたれて流るめりわたらは錦中やたえなん

この歌はある人ならのみかとの御歌となん申

竜田川紅葉葉流る神なひのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすか川もみち葉なかる

恋しくは見てもしのはん紅葉を吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへす散ぬるもみちはの行へさためぬ我そかなしき

秋はきぬ紅葉はやとにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはんもみち葉のふりかくしてし道とみなから

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみちの数をみよとか

吹風の色のちくさにみえつるは秋の木のはのちれはなりけり

せきを

しものたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれはかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみける

僧正遍昭

わひ人のわきて立よるこのもとはたのむかけなくもみち散けり

二条の后のまだ東宮のみやすん所と申ける時に御
屏風に龍田川に紅葉ながれたるかたをかけりけ
るを題にてよめる

そせい

紅葉ばのながれてとまるみなとには紅深き浪やたつらん

なりひらの朝臣

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くゝるとは

これさだのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

我きつるかたもしられずくらぶ山木々の木の葉のちるとまがふに

たゞみね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心ちこそすれ

北山にもみぢおらんとてまかりける
時によめる

つらゆき

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

秋のうた

かねみのおほきみ

竜田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍りける時紅葉を見て
よめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

神なひ乃山を過てたつた川をわたりける
時に紅葉のなかれけるをよめる
きよはらのふかやふ
神なひの山を過ゆく秋なれは竜田川にそぬさはたむくる
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原乃おき風
白浪に秋の木の葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそみる
たつた河のほとりにてよめる
坂上是則
もみち葉のなかれさりせは竜田川水の秋をはたれかしらまし

志賀乃山越にてよめる
はるみちのつらき
山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり
池のほとりにて紅葉のちるをよめる
みつね
風吹はおつる紅葉ゝ水きよみちらぬかけさへそこに見えつゝ
亭子院の御屏風の絵に川わたらむ
とする人のもみちのちる木のもとにむまを
ひかへてたてるをよませ給ひけれは
つかうまつりける

ちりとまりみぬ紅葉ならば霜と深くは まれなるらし
これぞこれんこの家の言の葉のこと
出らるらんや
嵐とく秋のなかばのまゝ霧はなか／＼世より月明ゆかり
題しらず　よみ人しらず
はゝその山の嵐にさそはれ夜はもみぢ葉になれぬ月あかし
かれ田のなかのひつらの方に出ぬ水の紅葉に秋そぬるらし
きく山に隠れの通路ときけりにまかする
けりゆらんめ法　とせい法師
紅葉は雑よこえ入てまてぞなん秋はなきなるとこもん前の露

寛平御時かる紀家とてまへまとおほく
せかれしれん竜田川とみなしかゝるよし
鏡かゝさてある花かぶし紅葉にあらる
たきり城
除山ちのあかちる水のちるそて秋は限と思ありぬる
秋の色うつる紅葉竜田川に思ひやりてとめる
法し素性
さしよお紅葉あかるのる竜田川みなとや秋のとまりなりけん
なつ月乃つこゝゆられ 自大井までくらめ法
夕月夜かくる花山にかゝるその紅のからふり秋はくるらん

たかしはこともの前を見る
ろつ[illegible]
たかふろ[illegible]ときゆんまみちちぬらと舞けし
秋ハつまかね

[illegible]

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　　　よみ人しらす

龍田川錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる　　　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

題しらす　　　よみ人しらす

おほそらの月のひかりしきよけれは影見し水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのゝよしのゝ山にみ雪ふるらし

今よりはつきてふらなむ我宿のすゝきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつそけぬらしあしひきの山のたきつせ音まさるなり

この川にもみちは流るおく山の雪けの水そ今まさるらし

ふるさとは吉野の山しちかけれはひと日もみ雪ふらぬ日はなし

わかやとは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬の哥とてよめる　　　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

志賀の山こえにてよめる　　　紀あきみね

白雪の所もわかす降しけは巌にもさく花とこそみれ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にてよめる　坂上是則

みよしのゝ山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとそみる

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみわけて入にし人のおとつれもせぬ

白雪の降てつもれる山里は住む人さへや思ひきゆらん

雪乃ふりけるをみてよめる

凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

ゆきのふりけるをよめる

きよはらのふかやふ

冬なから空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

ゆきの木にふりかゝれりけるをよめる

つらゆき

冬こもり思ひかけぬを木の間より花とみるまて雪そふりける

やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるを

のふりけるをみてよめる
坂上これのり
あさほらけありあけの月とみるまてによしのゝさとにふれる白雪
題しらす　読人しらす
けぬかうへに又もふりしけ春霞たちなはみ雪まれにこそみめ
梅乃花それともみえす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは
この哥はある人のいはく柿のもとの
人まろか哥也
梅のはなに雪のふれるをよめる
小野たかむらの朝臣
花の色は雪にましりてみえすとも香をたにゝほへ人のしるへく
雪のうちの梅の花をよめる
きのつらゆき
梅のかのふりおける雪にまかひせはたれかことことわきておらまし
雪のふりけるをみてよめる
紀とものり
雪ふれは木ことに花そさきにけるいつれを梅とわきておらまし
物へまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる
みつね
わかまたぬ年はきぬれと冬草のかれにし人はおとつれもせす

としのはてによめる　　在原もとかた

あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松もみえけれ

としのはてによめる　　はるみちのつらき

きのふといひけふとくらしてあすか川流れてはやき月日なりけり

歌たてまつれと仰られし時よみてたて

まつれる　　紀のつらゆき

ゆく年のをしくもあるかなますかゞみ見るかげさへにくれぬとおもへば

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらす　　読人しらす

わかきみは千世にやちよにさゝれいしのいはほとなりてこけのむすまて

わたつ海のはまのまさこをかそへつゝきみかちとせのありかすにせん

しほの山さしてのいそにすむ千鳥きみかみよをはやちよとそなく

わかよはひきみかやちよにとりそへてとゝめをきてはおもひいてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもなからへてきみかやちよにあふよしもかな

仁和のみかとみこにおはしましける時に御をはのやそちの賀にしろかねをつえにつくれりけるをみてかの御をはにかはりてよみける

僧正遍昭

ちはやふる神やきりけんつくからにちとせのさかもこえぬへらなり

堀河のおほいまうちきみの四十の賀九条の家にてしける時によめる　在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなるみちまかふかに

さたときのみこのをはのよそちの賀

大井にてしける日よめる

きのこれをか

かめのをの山のいはねをとめておつる滝の白玉千世のかすかも

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀
たてまつりける御屏風にさくらの花のちるした
に人の花みたるかたかけるをよめる

藤原おきかせ

徒にすくる月日はおもほえて花みてくらす春そすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏
風によみてかきける

きのつらゆき

春くれはやとにまつさく梅の花君かちとせのかさしとそみる

素性法師

いにしへにありきあらすはしらねとも千世のためし君にはしめん

ふして思ひおきてかそふる万世は神そしるらん我君のため

藤原三善の六十賀によみける

在原しけはる

鶴亀もちとせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはててん

この歌はある人在原のときはるかともいふ

よしみねのつねなりかよそちのかにむ

むすめにかはりてよみ侍りける

そせい法し

万代をまつにそきみをいはひつるちとせのかけにすまんとおもへは

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた

かすかのにわかなつみつゝ万代をいはふ心は神そしるらん

山たかみ雲井にみゆる桜花心のゆきてをらぬ日そなき

夏

めつらしきこゑならなくにほとゝきすこゝらのとしをあかすもあるかな

秋

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつしら浪

千鳥なくさほの河きりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみちを風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山した風に花そちりける

春宮のむまれ給へりける時にまいりてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

峰たかきかすかの山にいつる日はくもる時なくてらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらず　在原行平朝臣

たちわかれいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこん

よみ人しらず

すがるなく秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとかまたん

かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさんやは

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時
はゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

さだときのみこの家にて藤原のきよふがあふみの
すけにまかりける時にむまのはなむけしける夜
よめる

きのとしさだ

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらん袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞たちわかれなば恋しかるべし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

をしむから恋しきものを白雲のたちなんのちはなに心ちせん

ともだちの人のくにへまかりけるによめる

在原しげはる

わかれてはほどをへだつと思へばやかつみながらにかねて恋しき

あづまの方へまかりける人によみてつかは
しける

いかごのあつゆき

思へども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

相坂にて人をわかれける時によめる

なにはのよろづを

相坂の関しまさしき物ならばあかずわかるる君をとどめよ

題しらず

よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべきものを

この歌は、ある人、つかさをたまはりて、あたらしき
めにつきて、年へてすみける人をすてゝ、
たゞあすなんたつとばかりいへりける時に、
ともかうもいはでよみてつかはしける

ひたちへまかりける時に、ふぢはらのきみとしに
よみてつかはしける

寵

あさなけにみべき君としたのまねば思ひたちぬる草枕也

きのむねさだがあづまへまかりける時に

人の家にやとはれてありつきにてはしりてまうる
里からしられたる母のとみなくいへさせける
とみへしん
年老ぬれと心身と命おくれ親や思ふ人へのなと
あひみんそしてゆくへのあつまれかへりまほ
しかるつれをしるとそしらる
梅かやよ
老ぬるよとかなる人のまへかねてわする人によみ出たる
ともかれおいまへすまのかめたるありよめる
たちとれの人兵ハ源か
思ふのあるてとはそうなるにさらぬ別あり心残ぬるさらくさくきかん
みちのくにまかりけるへよるくれくれう
しける　　　　　帰りゆるよ
思ふ心ハにかさねつゝ親子をまても思ふ人ハ心つ引かぬ
人親まつれたる時よまれたる歌
まれてかしこきもあかくは心はまさてとひわかるん
わひしれけるへのこしれくかくまあそのりて
年つゝ春よまれてきてうくてりたる時よ
よめる　　　　　九河国こつよ
くるゝものかたのありてありつゝ人ちかてにとまらぬをしをしまれ

ちる花の人まつかほに人よとみてつらからう
しら玉の露やはらかん白山のゆきふる人の心をおもひ
よそには山花ほとりかく人をよろこびてゆかる
流しゆかん
春もは山ちかくなりて都ひとのわかれをおもひつゝ
落葉のちらけるかなこそ流るひまなる
月のつきにかくさればりきるなき人花を
乃こともさけさしひろく流りてよろしかるべき
ゆらりと花の心をもち
あやしきは時でとゝめて養娘の別かなしくなりね

年もとりの
蝶鳥もはなにきてまつれる夕暮ぞなきひさしやわらん
源のさゝ波の上に風わたるらんとそてまつらんかる
時よ山さくらばそてまつれ和ところ風ふきて
よみ人
志ゆめ
いかにせんはよろしき人に何の別のこゝろかなし
やまさくらの旅なるひのこゝのすゞてらく
月よりも人くまなくてそりそてみてなれお
しら露の海ならめ家 源さ
人の身のならなかくにたてらひろくもひていさそら
ぬべし

いまはこれよりかへりねとさねかいひけるおりに
よみける　藤原かねもち
したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす
藤原のこれをかゝむさしのすけにまかりける時にをくりにあふさかをこゆとてよみける
つらゆき
かつこえてわかれもゆくかあふさかは人たのめなる名にこそありけれ
大江のちふるかこしへまかりけるむまのはなむけによめる
藤原のかねすけの朝臣

きみかゆくこしの白山しらねともゆきのまにまにあとはたつねん
人の花山にまうてきて夕さりつかたかへりなんとしける時によめる
僧正遍昭
夕くれのまかきは山とみえななんよるはこえしとやとりとるへく
山にのほりてかへりまうてきて人々わかれけるついてによめる
幽仙法師
わかれをは山の桜にまかせてんとめんとめしは花のまにまに
うりんゐんのみこの舎利会に山にのほりて

くゆりくるかぜに橘のにほひのまとゐてしそある

俊恵法師せう

嵐にも梢吹そふ花のちりぬる花のまにまにをしまるるかな

慶運法師

あきも秋君とまちこしかひもなくかかる花のなかにすむ
仁和のみちもみなかしこきたつまりなくはつくらんかた
ちるのきぬは心しなかりけるよりしてくらわか
まちひとるまでにかはらぬ

浄弁法師

あなしてとふかも深きかはよるまちかへはかはるとやさくらはな

かんなりのつかまつりしすがたのおかみ
きこえしこたへてあるはいふ命のかぎれは中々
さらにまして得くかちりのそれ得かるおもひさう
月にとめて涙ゆかれ
秋もみなもなき命をもとも来ぬすみてもあかしとこそ思へ
とてもあはれなる

兼好法師

打むかふ今のかはり命のかはらのこれと身をかはりつらね
ちなみのたかきよにかよひてかなるかはして
まよれなるのあはりしもあかぬ

みつね

あられ嬢のそこもとよりこひさかりにひとねさせ給ひける時の歌

題しらす　読人〳〵　哥

あくかれてわかる雁の面影にまたかへらんとつみてこそゆく

ひとり思ふ秋の雁はかへらねるか雁はかへらんひまのてよ

花やもしふるらん春の雨にぬれきぬきせて

春雨のふるをとふめん桜色にまそほのことふまぬれ

こよひの山かしこまていつ井のもとまて花のひらる

人のきてしれぬなかりにしるらか

つゆかる

後のよ遠ぬこゝろに出る井せおそくも今いかれぬるや

たまあつさらへのこる庵に枕にひとりふ

く別かる家までかわる

さと乃里

志らぬる事力みちならくわかる井ゆふめかりてとあれんと

うたまる

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月をみてよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも

このうたはむかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに
あまたのとしをへてえかへりまうてこさりけるを
このくにより又つかひまかりいたりけるに
たくひてまうてきなむとていてたちけるに
めいしうといふ所のうみへにてかのくにの
人むまのはなむけしけりよるになりて
月のいとおもしろくさしいてたりけるを見て
よめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝなかされける時にふねにのりて
いてたつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこきいてぬと人にはつけよあまのつりふね

題しらす　　よみ人しらす

宮こいてゝけふみかの原いつみ川かは風さむし衣かせ山

あく／＼と昨名浦なる事に過されゆくほとなりしそせよ
こ此哥ハあつまの人のかきつはたの本と此人へ申也
あつまの此くへなとすゝへひとつ婦くつはひさすひ
るくハかきつ三河の国八橋といふ所ニいたれりとも名る
まつ此川のほとりに杜若の花とおもしろくさきたり
名乃哥にしまた此はなはなれけり杜若といふ五文字を
しをくのうちにすへて旅の心をよめんとて
よめる
在原業平朝臣
かく衣きつゝなれにしつましあれははるはるきぬる旅をしそ思ふ
せきしのかたと志る川中にある

角田川のほとりにいたりて都のことを恋しく
たちかくれ爰も川のほとりにいたりゐて思
ひやれはかきりなくとをくもきにけるかなとわ
ひあへるにわたしもりはやふねにのれ日もくれぬと
いふにのりてわたらんとするにみな人ものわひし
くてきやうに思ふ人なきにしもあらすさるおりし
も白き鳥のはしとあしとあかき鴫の大きさなる
水のうへにあそひつゝいををくふ京にはみえぬ
鳥なれはみな人見しらすわたしもりにとひけれは
たつねたりこれは何鳥そととひけれはこれなん

まゐらんためことのよしひろう候はんとてよめる

宿所にかへりかゝる事とも申けれはおやともさらはやかてと

暇しいとま申候

きく人も宮をこしらへてにしのかたにさふらふ

此寺はむかし男女まつかへのらまく

まつのくものやとにまいりてすゝめ

ちみさかりになれる女ひとり参りけり

名所なよ松のもと鳴鳥の声きこえよ

めでたきかんな

あはれ我のくるしみの床へまいりてよそにて

とも詠　松と

ふく風の声をそへにし我やまとことのはをちりひめぬらん

うしのこくへまいりたる時ちかく山鳥のみくるよ

我なる　みつる

きこえつる時しかくれなかりしものは白山の宮にのほる

あらしまへまいりたる時なけきてよめる

つゆふる

なきふかる松のあらなくに別ちれ心ほそくも思ひわかゆるかな

かくひのくまへまいりたる時みちにてよめる

君なる

さむしろに今宵も君とひとつ衣の袖におもひねぬ
たらちねのしらぬのへまかりたる時にかへさるの
浦といふ所にとまりて久しかりけれはひさしくなる
ましきにありける人々にちらるんなるついて
かくなん　　藤原の〇の家
なく秋おもふこころはむかしにけん廿二日の浦にかけてこそ見め
これはみなのとしよりはなれける時
あまの川といふ所のかれにたりける
さけるとのことつねにみとのひさしく
思ひてあまのとくあすると思ひかんなきらんて

十月のころにもとのひとつくれなんある
　　わり原のなのひとの絢
かくて十七文字やとらんにんる川原にすむ八きくよくり
みこはあとみつみつせんあり
まれなくともに給ふらぬ時
　　きみわかあつ〇
さる女に露きまれんまてはやとしれ人をわかれとしに
朱雀院のおほよりおほるまて時まる
むけ出てこなある
　　すなわち此故に

此よしおきてもぬあへ風高山寺の律外のまゝにて

素性法師

是ずるつらき月の花の姫もきるへぬ花の夢よあひ見や

かへさん

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

ほとゝきす　　おなし人

くへきほと時すきぬれや待わひてなくなる声の人をとよむる

うつせみ　　在原しけはる

浪のうつせをみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや

おなし　　壬生忠岑

たもとよりはなれてたまをつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

うめ　　よみ人しらす

あなうめにつねなるへくも見えぬかなこひしかるへき香はにほひつゝ

かにはさくら　　つらゆき

かつけともなみのなかにはさくられて風ふくことにうきしつむ玉

すもゝの花

いまいく日春しなけれはうくひすも物はなかめて思ふへらなり

からもゝの花　　ふかやふ

あふからも物はなほこそかなしけれわかれんことをかねておもへは

たちはな　　をのゝしけかけ

あしひきの山たちはなれゆく雲のやとりさためぬ世にこそありけれ

さくらの花を　とものり

みよし野の山へにさけるさくら花[illegible]

やよひに[illegible]　伊勢

桜は[illegible]

あつひつる

[illegible]

[illegible]

くたは　僧正遍照

[illegible]

はつかしひ　[illegible]

[illegible]

[illegible]　とものり

[illegible]

朱雀院の[illegible]

[illegible]

か　つらゆき

[illegible]

[illegible]　とものり

[illegible]

志賀に　　よしき人志ら次

御りそらくやきつきその花ちんとこしとにちもしきこらぬひなから

見しうせん乃花　　とらとの里

桜やらの花からりくらりらきんのひまれやこゝにしとらる

わきられ　　淡人志ら次

あらとみくよ世こめなき花らつ蝶氏と淡ひなりとや云ゆしらん

久すよこし　　やき人乃ろぬ実

ちつめよこしとや我のまつ猿ろんそく白猿のうちもうつりきき

二葉居士ゐ氏やとしむれとやらる附よめとよきを

つりを称き世のなる猿とまよ世経ひなる

文庭やれゆく

花のおにおしめとよき花なるのみかふみとあるる附ちるる

赤のよくさ　　なれとしたさ

出らくこつのにわしのかく里面をまれらもき数々わ

やまし　　寺あつゆるる

郭公よの我妻のやまし日ほしあらとへきけとつんるものもうるる

加つしき花　　さらえなへし次

ら蝉のつらん花とれくしれ花われ多猿ぬきさ引き

くハ草くさ　　ゆきや梅

しらぬの露になぐちくいなくさまれつまなに平のかわねん猿

さうゝけ　なくむしもしけし
秋の夜さへ長きあかしのしも猶くそ露ハうめくる
身のうけ　あけ方
紅とそ霧のこの比ふきたれは鳩もひらす鳴の天の虫
月はうけ　けのもの袖にきく
何よかけてあはれはかなく月見吹く人や旅の山風
立ひ　春世の涙し
櫻からとものまつ花あさ紙もひたるはめうく
さてま川ひハも世の絵を
き流めのゆ

いたらめまほしつまたつひハぬるゝ世の波も今よみくしく
なし　き川めくしみえ
長歌
あら花あまけきからつめそつれともにあひろてとハ横ぬれ
かりそくから梅所まてきれさらけの日かる
安倍清納言
浪の波をのけさかしかとにきてもハ春のふりやあまる事るらん
いかく何ぶ　のをり花袖かきくく
かしにあるる浪のあつく紙書をれいてさもかる花こふらん
うしさふる　あハ花つきつれ

秋ことにつらくも花はつらねとも[illegible]ものこそ[illegible]

伊勢

浪の花[illegible]かまれてちらく[illegible]風[illegible]

かつやは　つゆ

しはらく[illegible]やかわるらん[illegible]白雪

よしのやま

豆川の山[illegible]白や[illegible]のつよせしまへ　時ならぬ

おさき乃　たかやま

あすかめ[illegible]の[illegible]

うるめこや　[illegible]

秋かれと月のみつ花[illegible]

百和香

花しとにおれらしとも風とおれ[illegible]　思

しかんひとしつれ

するかんあらし

あけらて

春はなのしかしひらかなる世は秋くるかのへくしさよ

なきさ哭

かんやこけしく

あれはつるこちなくて[illegible]川をこえてひんやうこえ[illegible]

大江千里

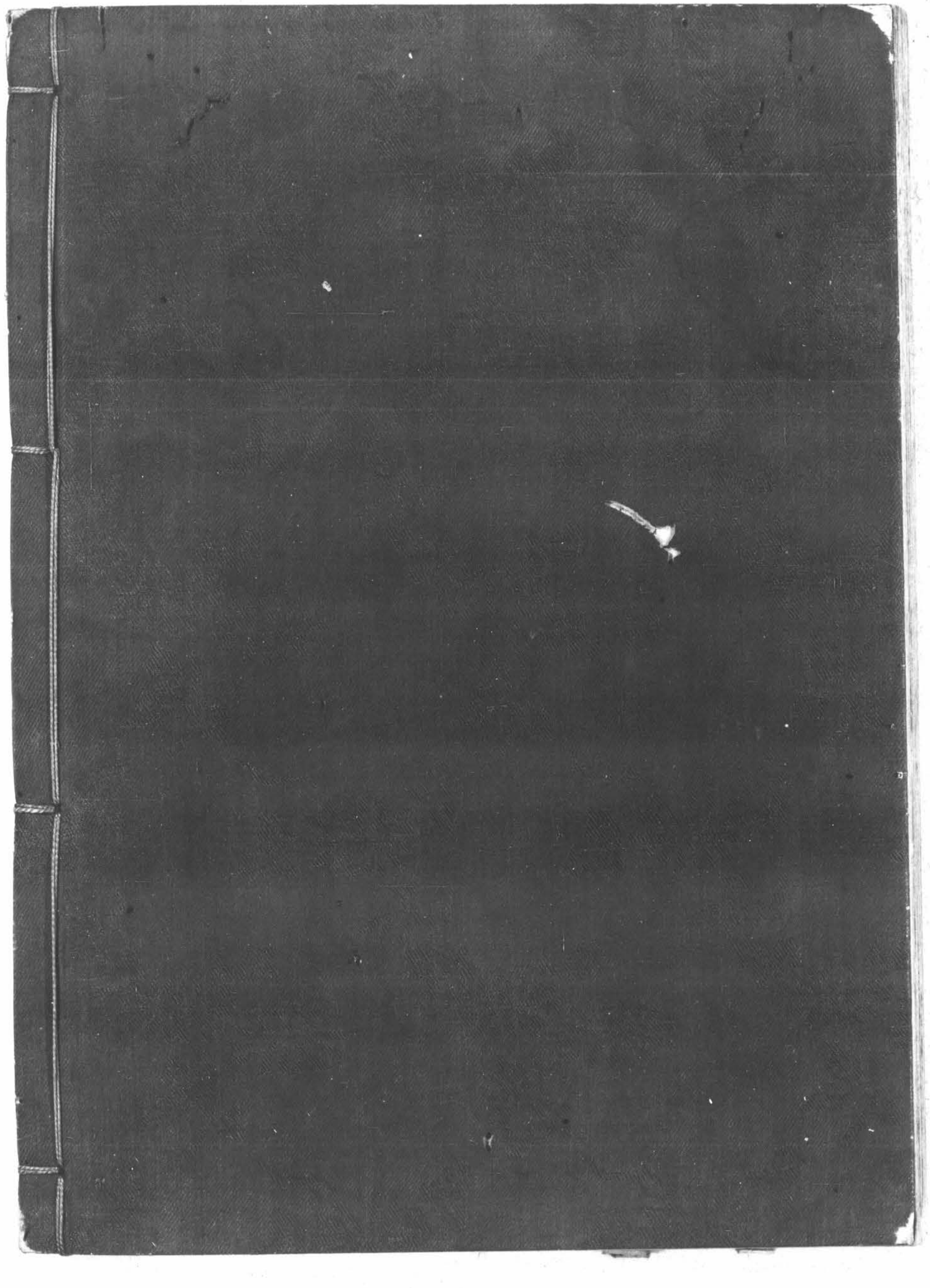
のちまはさ花をられしかよるみるへまれとあさいはねのかや

[illegible]しめ[illegible]ゆくあかあ[illegible]けて

此の本はあとくのつひられたるなり

借用写之

筆のあとのにあくやしとてもはかなきのけふことなまちり

なにかし

九州大學圖書印